

『檜山節考』と『蕨野行』に関する比較考察

中 島 賢 介

序（本論の位置付け）

本論は、2001年10月21日、信州大学に於いて開催された日本独文学会秋季研究発表会のシンポジウム「森林・文化・人間（Wälder・Kultur・Menschen）」で発表した「日本文学における森林内なる自然を觀てみよう—深沢七郎『檜山節考』から」の第2章「日本文学からのアプローチ a『檜山節考』とは」の論旨を補完するために書いたものである。当シンポジウムでは発表時間の都合で、「棄老伝説」が現代の文学にもたらす影響や村田喜代子『蕨野行』との比較考察をする時間を割愛せざるを得なかった。来年独文学会の計らいで発表を共著として製本する機会に恵まれたが、その中にも入れられそうにもないのが本論である。

どういう発表であったかは、報告書の抜粋から察していただきたい。

まず中島は、日本人の自然觀の今昔を概観するなかで、環境における物理的現象を把握することと文学研究のアプローチとの関係について問題提起を行ない、報告の方向付けを行なった。そして引き続き、日本文学の流れの中、及び「棄老」のモチーフという視点から『檜山節考』の位置を明確にした後、「檜山」を「人間の『外なる世界』から『内なる世界』へと続く臨界」として位置付けた上で、この作品の解釈に移った。『檜山節考』における「森林＝山」は、自然の背景として切り離されて遠くに存在しているのではなく、むしろ人間が積極的に関わってきたにもかかわらずその未知性に対して畏敬の念を抱かざるを得ない、いわば「内面への旅路」へと通過する場として考えた中島は、この作品を、「現実の自然と人間の内面の森」、言い換えれば「内なる自然と外なる自然」の有機的結合の役割を果たすものであるとし、現代日本の自然觀において、自然破壊、自然に対するイメージの固定化といった傾向によって断絶している「二つの自然」の橋渡しを成すものである、とした。

この事を通して中島は、文学作品を通して自然をみる、さらにはそこから現代の自然觀を分析し、自然と人間の関係について考えていく可能性について指摘した。

そもそもこのシンポジウムでは、研究分野の枠組みを超えて自然そのものをどう捉えていくかを論じていこうという文学会では画期的な試みであった。コーディネーターの松岡幸司氏は、農学部と人文学部の2学部を卒業した独文学会気鋭の研究者であり、基調講演をした菅原聰氏も農学部の名誉教授である。従来の文学研究では、森林はあくまでも作品解釈という枠組みを超えられずにい

たが、今回の発表では文学作品の中の森林に対する視点を「作家が扱った森」から「作品に現象してくる森」へと変える試みを行った。更には「文化的創造物である森林がいかに関文学作品に現象しているか」「それを通して我々は何を知りうるのか」というテーマを掲げそれぞれの分野からアプローチしてみた。

1 棄老伝説

棄老伝説とは日本に現存するもので、古くは『大和物語』『今昔物語集』『枕草子』にも取り上げられている、老人を山に棄てるという話である。その後、民話「姥捨て山」として全国に語り継がれる。ただ棄老伝説を「姥捨て山」に包括してしまうのはかなり危険であると指摘できる。それらのストーリーが多種多様で、老人がどんな形で棄てられるか、あるいは棄てられた後老人はどうなったかなどによって話の展開が変化するからだ。ストーリーのみで分類すると、次の4種類が挙げられる。因みに『日本の昔話ハンドブック』においては、「難題」型「もっこ」型「隔離」型の3項目にしか分類されていない。

- a 「難 題」型 山に棄てられた老人が息子に知恵を貸し、家に戻ってくる話
- b 「もっこ」型 孫が老人を棄てる「もっこ」を見て、今度は自分の父親が入るのだと言ったので、驚いた父親が老人を連れ戻す話
- c 「嫁 姑」型 嫁が姑を嫌い、夫に頼んで姑を山に棄てさせる話
- d 「隔 離」型 ある年齢に達した老人を別の場所に隔離する話

『日本の昔話ハンドブック』から後半の1項目を付加した理由は、柳田国男の『遠野物語』に出てくる話があまりにも他の項目と異なることによる。ここで強調しなければならないのは、前半2種が老人の知恵の大切さを痛感し棄てるのをやめたという、極めて教訓としての色彩が濃いという特徴である。これらは、ペルシャの「アヒカル物語」から「イソップ物語」に通じ、「伊曾保物語」の源流に棄老という伝説が加わったものであると考えられている。つまり、「労働力の劣る老人や病人を排除する習慣」もしくは「無実の罪」のため、棄てられる運命にあった老人が一命を取り止めることによって親孝行が奨励されるといった筋書きである。だが、教訓としての色彩が濃ければ濃いほど、逆に知恵のためだけに親が存在するといった実利的な側面が払拭できないことも事実だ。

一方、後半2種はそうした教訓的な色彩が全くなく、その逆か無関係に存在している。嫁姑型は人間同士の憎悪の典型であり、隔離型は地域の習慣以外の何物でもない。嫁が姑を嫌うことは珍しくもなく、むしろ生活背景の違う他人同士が一つ屋根に暮らす訳だから棄てるまではいかずとも、力の弱い者が戸外へと追い遣られるのは想像に難くない。また、隔離型も貧困の世界を生き抜く上では赤子の間引き同様止むを得ないことであつたかもしれない。

となると、この2種は、前半2種とは対照的な位置を占めているといえる。言うなれば、「ヒューマニズム」と「リアリズム」の違いが期せずして見受けられるのである。し

かし残念なことに、民話として継承されているのは、前半2種が基本となって構成されたものであり、後半の2種は『大和物語』、『遠野物語』に散見されるに過ぎず、その後民間伝承として広がった形跡は認められない。「姥捨て」が現実にあったかどうかの議論はともかく、民話として前半2種への偏りが見受けられることは否定できない。後述するが、棄老伝説は、こうした相反する2つの側面を持っていることが確認され、広く伝播していくのは「ヒューマニズム」の方なのである。そこに着目したのが、『楢山節考』であり、『蕨野行』であるといえる。

2 『楢山節考』と「棄老伝説」

今年勉誠出版から上梓された相馬庸郎著『深沢七郎 この面妖なる魅力』は帯にも記されている通り、「近代文学史上の鬼才深沢七郎についての初の総合的探求の書」である。というのも、今まで様々な深沢論が世に出ているが、依然として論じられていない点が多く残されている。著者はそんなことを弁えながら様々な角度から深沢七郎という人物を浮き彫りにしている。

相馬氏は、『楢山節考』をこう表現している。

「深沢は、彼の創意したアンチ・ヒューマンな物語を、民話的な方法を充分活かすことにより、その迫真性の獲得に成功したわけなのであった。」

『楢山節考』のストーリーは、先述した4種のどの型にも属していない。いや、分類の枠組みから大きく逸脱している。文体そのものは、歌や名前の由来を散りばめて、小説に民話的な性格を持たせようとした工夫が感じられるが、その内容は全くのオリジナルで、前章の後半2種を髣髴とさせる。例えば、主人公おりんは異界への憧憬が強く、そんな母親を息子辰平は寂しく思う。しかし、結末では孫とその妻がおりんの着ていた服を自分のものにして平然としている姿が淡々と描かれている。おりんとは正反対に、生に固執していた又やんがその倅によって谷底へ突き落とされる場面など、生々しすぎて読者を驚嘆させるに充分である。一度は棄てられたにも関わらず自力で家に辿り着いたために息子に罵られる光景は、現代にも通じるものがある。こうした全ての設定が、今までにはなかったストーリーを展開させ、読者を魅了した。中でも中央公論新人賞の選考会の席上では、三島由紀夫が繰り返しこの作品を「気持ち悪い」を連呼したと言われている。また、正宗白鳥においては、「私はこの小説を面白ずくや娯楽として読んだのじゃない。人生永遠の書の一つとして心読したつもりである」と評すに至った。先述したが、ヒューマンなものを偏り過ぎていた傾向をリアリズムに引き戻すことにより、多くの読者が共感したのである。

以上のことから、『楢山節考』と「棄老伝説」は、「子どもが親を棄てる」という一点で辛うじて接しているに過ぎないことが分かる。伝説の理解も極めて個性的で特殊である。しかしそれでいて読者に深い感動を与えるのは、その特殊な理解の仕方が人間の生き様をありありと写し出すことに繋がっているからであるといえる。これは、多くの研究者が小説の創作動機に「母親の死」を挙げていることから伺える。こうなるともはや「棄老伝説」は伝説ではなくなり、作者が自分の母親を語る装置としての機能を果たしていることになる。あるいは、「棄老伝説」という側面から観ると、倅が又やんを突き落とすという描写によって、おりんが特別な存在へと押し上げられるような効

果を深沢は狙ったということができる。そう考えれば、「棄老伝説」は『楢山節考』の中で不可欠な役割を担っているということになる。

3 『蕨野行』と「棄老伝説」

『楢山節考』から28年もの歳月を経て、「棄老伝説」は再び村田喜代子の小説『蕨野行』となって登場する。この作品は、筆者自身が参考資料として、『日本農書全集第二巻・第二十四巻（農山漁村文化協会）』が挙げられているが、舞台設定が柳田国男の『遠野物語』に拠っていることは明らかである。1章の分類からいうと「隔離」型に該当する。

しかし、この小説のオリジナリティーは、陰悪であるのが相場である嫁と姑が、心温まる内面の会話で物語が展開することだ。ということは、1章の「嫁姑」型とは、全く逆のパターンであるといえる。すなわち、嫁と姑が心を通わせ、今後の心配を息子に代わって嫁が伝達するという設定が施されている。ここにおいても、従来の「棄老伝説」にはない特徴が見受けられる。「棄てる」という行為よりも、むしろ老人を「隔離する」というホスピスの性格^{註1}を帯びているといつてよい。蕨野で自分たちが独自に生活を営みながらお互いを支え合うという生活が保証されているのもこの小説の特性である。それゆえ、嫁姑のみならず、老人同士の会話が随所に登場し、生と死が混在しながら物語が進行していく。棄老であってもそれがすぐに殺すことを意味しないということになると、伝説との関連性は『楢山節考』同様に希薄になる。

だが、その年が不作で村全体が飢饉に見舞われ老人達を見棄てなければならないという事態に陥り様相は一転する。嫁のヌイが夫の団右衛門に姑を連れ戻そうと哀訴するが、団右衛門は庄屋の談合で決まったことだと取り合わない。そして遂に、

「畑の不作も進みたれば、日延べも難し。秋、冬を越える手立ても薄きならば、里の者の命を取るか、ワラビの命を取るか。自明の理なり。このためにこそ、ワラビ野は有りてよい。」と言いつつ。背に腹は換えられないというのだ。このような窮地に至ることで、村人達は、ワラビ野にいる老人達との訣別を決定する。すわわちこの最期通告で「棄老」が現実のものとなった。

老人達はどうか。途中で力尽きた者もいたが、残された者同士で約定を犯してでも生き抜こうと誓い合う。禁じられている狩猟をしてまでも。棄てられたことを自覚すると同時に、「おれだちも共に生きんか」と自分たちなりに与えられた生を全うしようとする。ここに、『楢山節考』では観られなかった、死に向かう人間全てが美しく描写される場の雰囲気を整うのである。

ということは、『蕨野行』においての「棄老」が、ワラビ野に隔離されたレンが死を受け容れる体制を整えるための契機の一つであることが分かる。また、最終的には自分が死に行く理由が判明し、レンが納得してから死ぬという設定は、『楢山節考』では描ききれなかった部分ではないか。輪廻転生という思想へとバトンを渡す装置としての「棄老」がここにある。

4 『檜山節考』と『蕨野行』との相異

2章、3章では、2つの小説それぞれが持つ特徴を「棄老伝説」に関連させて述べてきた。次に、作品を比較するため、いくつかの観点から2つの小説の相異を整理すると以下のようになる。

	深沢七郎著『檜山節考』	村田喜代子著『蕨野行』
初出	昭和31年	平成6年
時代背景（初出当時）	高度経済成長	バブル崩壊
舞台・季節	信州の貧しい山村	不詳
題材（棄老伝説との関連）	ほとんど無関係	「隔離」型を踏襲
登場人物（老人）	おりん、又やんが別々に登場	レン他9人が集団で登場
構成	祭りから檜山行きまで	蕨野行から再生するまで
死ぬ場所	凄惨な光景	牧歌的な美しさ

何が2人の作家にそれぞれの「棄老伝説」を描かせようとしたのか。更にこれらの作品が読者にどう受け容れられ、感動させたのか。少なくともこれらの相異から考察を加えることができる。

『檜山節考』の方は、先述した通り、「母の生き方」を具体的に小説として描き出すためには厳しく貧しい場面設定が必要であったこと。両極端な2人の老人の最期を通して、人間としての生き方の厳しさを問おうとした。現在の「尊厳死」にも通じる問いを読者に発しているということが出来る。特に主人公おりんについて、彼女が自分が家族の中でどのような役割を果たしているのか明確に示されていて、山村における定められた生き方を彼女自身が肯定している。結果、雪が彼女を包み込むという最高のシチュエーションに恵まれる。一方、定めに反し生を貪ろうとした又やんは、息子から合法的に処分されるという^{註2}結末を導いてしまう。又やんにしてみても、生を全うしようとしているのは事実である。だが、結論から観た限りでは、死という現実からの逃避に過ぎないことが合法的処理という最期を向かえることで明確になっている。

『蕨野行』は、『檜山節考』のようは定めに従う従わないの2項対立ではなく、それぞれの生き方が全て肯定されて描かれている。蕨野に向かう老人にもそれぞれの人生があり、蕨野の行かず森の中で晩年を過ごすレンの妹シカのような生き方も選択肢として残されている。様々な選択肢の中で自分の生き方を貫き通すために、レンはシカと一緒に山で暮らそうとの申し出を断る。ここにおいても人生をどう生きるかというテーマは依然として失われていない。ワラビとしての掟を破り動植物を食してしまうのも、9人が決意したことで、自分たちの新たな掟に従って行動していることには変わらないのである。それぞれが歩んできた道のりこそ違えども、各々が死とどう向き合っていくかを考えているところなど、先述したがホスピスの考え方に相通じるものがあるといえる。

5 様々な記述の比較

a 主人公と年齢

「おりんは、今年六十九だが亭主は二十年も前に死んで、一人息子の辰平の嫁は去年栗拾いに行った時、谷底へ転げ落ちて死んでしまった。後に残された四人の孫の面倒を見るより寡夫になった辰平の後妻を探すことの方が頭が痛いことだった。村にも向う村にも恰好の後家などなかったからである。(中略)

榎山祭りが三度来りゃよ

栗の種から花が咲く (中略)

この歌は三年たてば三つ年をとるという意味で、村では七十になれば榎山まいりに行くので年寄りにはその年の近づくのを知らせる歌でもあった。』『榎山節考』

「ヌイよい。これからおれが話すことは、たまに民条村の生家へ遊びに帰るときも、口外はならずなり。この押伏の地の秘事は押伏にて留どめるべし。民条村にも内々の約定有りつるが、それは民条の地にて留どめて有るやち。およそ人の在る所には村や庄が有る。生きるに厳しい土地なれば、村々の結束は固かるろう。そこに生まれた約定は、かならず守りて内に秘めたるべきか。

押伏に上と中と下の三つの庄が有る。この三ヶ村の年寄に約定が有るなりよい。年々の田仕事の務めようやく終えて、時疫、齢の障りも無事乗り越えて六十の齢を迎えたれば、関所一つ待ちて有るやち。おれは今年その齢に当るなれば、関所の前に立ちたるなり。』『蕨野行』

両者の描写には、ストーリーとしては全く違う作品であるはずだが、かなり類似した事項が含まれている。まず、年齢の差こそあれ、ある年齢になれば健康であるにもかかわらず自分の家族から離れなければならないこと。いや、健康であるがゆえに隔離されるという点が似通っている。更に、両者（おりんとレン）にとって、「棄てられる」のではなく、自らが「確固たる意志」を持って出て行こうとしているということが挙げられる。しかし、彼女らにも若干の不安材料もないわけではない。

b 隔離されることへの不安

「おりんが待っていたもう一つの声は、実家から飛脚が来て向う村に後家が一人出来たことを知らせに来てくれたのである。その後家は辰平と同じ年の四十五で、三日前に亭主の葬式がすんだばかりだそうである。(中略) 亭主が死んで三日しかたたぬのに、すぐとんできて話をきめたいという様子は後家の後始末がよくよく心配だったのだろう。うちの方でも急いで来てくれて有難いことだと思った。来年は七十で榎山まいりに行く年なのだから、この年になっても嫁がきまらなかったらどうしようと焦っていたところに、丁度年恰好のうまい話があったものだ、もう少したてば嫁が父親か誰かと向うの方から来るだろうと、肩の荷が降りたように安心したのである。』『榎山節考』

「ただ一つ心に残ることは、若え嫁なるおめのことなりよい。団右衛門の先妻は病弱にて長く病んで死にたやち。子も残さずてよい。そこで心がけ良く身の丈夫なるおめを、わざわざ遠き里より貰うて参ったが、団右衛門とは二十も齡の離れて有る。若えことは哀れにて愛しきか。義弟伊作やテラとの折り合い。庄屋の若えかかの務め。跡取りの子をば生む役目。おめの仕事は山と有り、馬庭の家に大事のことなる。」『蕨野行』

彼女らの不安材料は、両方とも残していく家族を支える嫁に関することである。『楢山節考』では問題が解決したような記述になっているが、心配の種が息子の後添えから孫の嫁に移行しただけで根本的な解決には至っていない。『蕨野行』においても、孫や年上の義妹の折り合いなどについて心配が解決されないがために心の会話が續いていく。しかし両者とも、その心配は「家を出る」ことを妨げるほどの要因とはならない点が酷似している。ということは、主人公をめぐる基本的な枠組みは30年足らずの間も変わっていないということになる。棄老という村に伝わる習慣を頑なに守ろうとする健気な主人公を中心に物語は展開していくのである。

c 残された嫁の姿

「戸を開けようとした時、松やんが納戸の方から出てきた。大きい腹にしめている帯は、昨日までおりんがしめていた縞の細帯であった。松やんが開けて出て来た納戸の奥では、昨夜おりんが丁寧に畳んでおいた綿入れを、もうけさ吉はどてらのように背中にかけてあぐらをかいて坐っていた。
(中略)

辰平は戸口に立ったまま玉やんの姿を探したがどこにも見えなかった。』『楢山節考』

「お姑よい。おめは秋の末には里へ帰ると言うたのう。その約束は何としたか。こうなれば一刻も早よ、野をくだるべし。(中略)

ワラビ野はすぐ凍えつるなり。命保てて有るならばお姑よ、早よ野を仕舞うて帰るべし。」

『蕨野行』

では、30年足らずという歳月が2つの小説の間に、日本はどのような発展を遂げたのであろうか。『楢山節考』が上梓された昭和30年代は日本が戦後の復興を高度経済成長という極めて即物的な発展をしようとしている時期である。方向性が見えてきた分、文壇においてもその時流にのることが手っ取り早い方法であったかもしれない。しかし、そういう時期であったからこそ、『楢山節考』は自分たちの生き方の中で長年培われてきたアンチ・ヒューマンなものを出すには打ってつけの舞台であったといえる。案の定、文壇の内外でこの作品は主流ではないにせよ、大きな衝撃を持って人々に受け容れられた。

『蕨野行』もその点同様で、バブル経済が弾けた後に人々が自分たちの浮き足立った生き方に疑問を感じている最中に発表された。65歳以上の人口の比率が7パーセントを超えた社会、すなわち高齢化社会になって20年以上もの歳月が経っている。そろそろ高齢層が本格的に死に直面していく時期に差し掛かっているといっても過言ではない。ひたすら多忙な生活に身を委ねてきた自分たち

中 島 賢 介

が、歩んできた人生を振り返る際にこの小説はどのように映るだろうか。彼らにとって『楢山節考』のような衝撃よりも、むしろ回顧する際にオーバーラップするものの方が必要となるはずである。そのためにも、老人が複数である必然性がある。また、舞台である山村の風景も回顧の一助という機能を十分に果たしている。その一方で自分が他の何かに繋がっていたい読者層への欲求にも臨死体験、再生への可能性を示唆することで見事に応えている。

結び

『蕨野行』の解説で辺見庸氏がこう書いている。

「ところで、絶賛を博した本書の単行本刊行時に、書評のレベルでは当然のなりゆきではあるのだろうが、棄老伝説を作品の骨格としているという点から、深沢七郎の『楢山節考』（一九五六年）との比較がなされたことがある。『蕨野行』はいわば『楢山節考』の主人公のその後を描いたようなものだという書評があった。」

その理由を彼は3頁にわたって説明しているが、論旨が明確で確かに頷ける考察である。しかし、残念なことに『蕨野行』がいかにも未来を示唆した作品であったとしても、文学史上において「棄老伝説」とそれをモチーフとした『楢山節考』とを切り離すことは不可能である。今回はその描き方を検証していくことで、辺見氏の主張する通り、「うがった見方」には意味がない。だが、比較検討することで我々が辿ってきた社会の時系列で、共通するものと次元の違うものがあるのは当然だ。それを、時代性に結びつけることで新たな問題点が生じてくることも見逃してはならない。

つまり、『蕨野行』にしても、自分の人生を「生き切る、生き抜く、生き通す」という命題を避け、次世代に生まれ変わるという結末によって先送りしているという点を指摘することもできるからだ。それは、解説という特性上止むを得ない分析であろう。

だが、文学研究において、比較検討が無駄ではないことを証明するつもりで本論を書いた。その点を加味して再読していただければ幸いである。

注

- 1 ホスピス（Hospice）とは、末期癌など回復不可能な患者を収容する施設のこと。肉体的苦痛除去を始め、孤独感や死の不安など精神的な悩みの相談に応じ患者に平安な死を迎えさせることを目的としている。本論では、『蕨野行』における棄老という行為が、ストーリーの展開から老人を即座に見殺しにしてしまうのではなく、ある程度関係を保ちながら安らかな死を迎えさせることに重点が置かれていることに着目した。
- 2 山村での定められた生き方に背いたものは、雨屋が袋叩きにされても当然だとする習慣があった。それだけ食料に関する掟が厳しいものが合った。ゆえに、倅が又やんを谷底に突き落としてもそれは誰からも咎められることではない。

「楢山節考」と「蕨野行」に関する比較考察

参考文献一覧

- 深沢七郎著『楢山節考』新潮文庫 新潮社 昭和39年
村田喜代子著『蕨野行』文春文庫 文藝春秋 平成10年
日本民話の会編『ガイドブック日本の民話』講談社 平成3年
稲田浩二・稲田和子編『日本昔話ハンドブック』三省堂 平成13年
日本文学研究資料刊行会編『井伏鱒二・深沢七郎』日本文学研究資料叢書 有精堂 昭和52年
『國文学』「特集深沢七郎と五木寛之」學燈社 昭和51年6月臨時増刊号
相馬庸郎著『深沢七郎 この面妖なる魅力』勉誠出版 平成12年
遠丸立著『深沢七郎 一文学と、ギターと』沖積舎 昭和52年
折原脩三著『深沢七郎論』田畑書店 平成元年